HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | リチャード・フォーク著『パワー・シフト：新しい世界秩序に向かって』 |
| Author(s) | 五十嵐, 元道 |
| Citation | 境界研究, 11, 95-100 |
| Issue Date | 2021-03-31 |
| DOI | https://doi.org/10.14943/jbr.11.95 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/83585 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | 11_06.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

［ 書評 ］

# リチャード・フォーク著『パワー・シフト：新しい世界秩序に向かって』*

五十嵐 元道

リチャード・フォーク(Richard Falk)は国際法と国際政治の領域における知の巨人の一人であるが、大きく評価が分かれる人物でもある。本稿は、彼の『パワー・シフト：新しい世界秩序に向かって』（原著：*Power Shift: On the New Global Order* (London: Zed Books, 2016)）を中心に、改めてフォークの国際政治思想とその意義について検討する。

## 1．リチャード・フォークと本書の位置づけ

フォークはプリンストン大学、その後、カリフォルニア大学サンタバーバラ校に在籍し、数多くの論文と著作を発表してきた。また、よく知られているように、1960年代末、サウル・H・メンドロヴィッツ(Saul H. Mendlovitz)らとともに「世界秩序モデル・プロジェクト」（WOMP: The World Order Models Project）を立ち上げ、世界秩序に関する様々なビジョンを発信してきた。WOMPは世界秩序の在り方を検討するグローバルなアソシエーションで、日本では坂本義和や最上敏樹がWOMPのメンバーとして知られている。また、フォークは国連人権理事会が指名した国連特別報告者として、パレスチナ被占領地での人権状況の調査を行うなど、実務家としても活躍してきた。

こうした業績にもかかわらず、英語圏の国際関係論の教科書でフォークを大々的に取り上げるものは、管見の限り、非常に少ない。けれども、ヘドリー・ブル(Hedley Bull)が『アナーキカル・ソサイエティ』のなかで、フォークの議論をきわめて重要なものとして扱っていることは、国際関係論の研究者の間ではよく知られている(1)。なぜブルがフォークをそれほど重要な論客としたのか。それはフォークの研究が、英国学派で言うところの「連帯主義」(solidarism)を代表するものだったからである。連帯主義とは、国際社会が共通の規範や制度を持ち、それが国家の主権を高いレベルで制限している状態を意

* リチャード・フォーク著、前田幸男、千葉眞、小林誠、小松崎利明、清水奈名子訳『パワー・シフト：新しい世界秩序に向かって』岩波書店、2020年。

(1) ヘドリー・ブル著、臼杵英一訳『国際社会論：アナーキカル・ソサイエティ』岩波書店、2000年、xvii頁。

**DOI : 10.14943/jbr.11.95**

味する[2]。フォークは決して世界政府のような構想を展開したわけではない。彼は国家中心主義を批判し、人間個人ならびに人類益を最も重要な価値規範のひとつと位置付け、主権国家システムの陥穽を克服することを望んだ。それは主権国家の境界線を超えて、トランスナショナルな諸勢力が脱領域的に人類益の実現を推進するといったビジョンである。彼は1975年の論考のなかで、それを「グローバルな人民主義」(global populism)と呼び、WOMPによって具体的構想を提示しようとした[3]。それゆえ、ブルは国際社会の多元主義(pluralism)的側面――すなわち国際社会で共通の規範や制度よりも、国家の主権が優越した状態[4]――を明らかにする際、フォークの議論をひとつの参照点として扱った。これは英国学派の代表的論者、ロバート・H・ジャクソン(Robert H. Jackson)も同様であった[5]。

また、批判的安全保障論の領域においても、フォークの研究は重要である。たとえば、ケン・ブース(Ken Booth)は、批判的安全保障論の著作のなかで、フォークの立ち位置を「急進的国際理論」(radical international theory)と呼び、有力な理論的アプローチのひとつとして位置付ける[6]。批判的安全保障論の論者の多くが国家中心主義を批判し、人間個人の安全や解放を前面に押し出す。その際、しばしば物理的な脅威だけでなく、グローバルな社会経済的課題も重要な問題と見なす[7]。こうした分析視角は、すでに1970年代にフォーク(ならびにWOMP)が提起し探求してきたことだった[8]。さらに研究者と社会の関係についても、フォークの思想は批判的安全保障論のそれと共通する。研究者の理論や分析が既存の秩序に与える影響について、フォークはグラムシ的な立場をとる。すなわち、世界秩序の変動においては意識の変化が先立ち、それが人々を動員し、最終的な変動につながるとする[9]。それゆえ、研究者が価値中立的であるとは考えない。むしろ、積極的に人類益といった価値を主張することが必要と考える。以上の点から、フォークの研究は批判的安全保障論の先駆と言えよう。

本稿が取り上げる『パワー・シフト』の分析視角は、こうした1970年代の諸研究から一貫

(2) Barry Buzan, *An Introduction to the English School of International Relations* (Cambridge: Polity Press, 2014), pp. 89–90, 113–114.

(3) Richard Falk, "A New Paradigm for International Legal Studies: Prospects and Proposals," *The Yale Law Journal* 84, 1975, pp. 999, 1009–1015.

(4) Buzan, *An Introduction to the English School*, pp. 89–90.

(5) Robert H. Jackson, *Classical and Modern Thought on International Relations* (New York: Palgrave Macmillan, 2005), Ch. 7.

(6) Ken Booth, *Theory of World Security* (Cambridge: Cambridge University Press, 2007), pp. 59–64.

(7) Steve Smith, "The Contested Concept of Security," in Ken Booth, ed., *Critical Security Studies and World Politics* (Boulder: Lynne Rienner Publishers, 2005).

(8) Richard Falk, "Toward A New World Order: Modest Methods and Drastic Visions," in Saul H. Mendlovitz, ed., *On the Creation of a Just World Order* (New York: The Free Press, 1975).

(9) Falk, "A New Paradigm," p. 995.

したものであり、連続性がある。ただし、『パワー・シフト』は2000年代、2010年代に世界で起きた具体的な事象を取り扱い、そこから秩序変動の契機を読み解く点で、確かにアップデートされた著作である。さらに本書には、フォークの秩序変動に関するビジョンや概念がコンサイスにまとめられており、数ある著作のなかでも主著のひとつと見なして良いだろう。

## 2．古い地政学から新しい地政学へ

では、『パワー・シフト』は現代の世界秩序をどのように捉え、どういった変動の契機を見出しているのか。本書の主要なテーゼを一言でまとめるなら、「古い地政学」から「新しい地政学」への変動に関する考察、となる。そこで本稿は古い地政学、次いで新しい地政学について検討する。

### 2.1 古い地政学

フォークによれば、古い地政学は、近代性(modernity)のイデオロギーを中核する(10)。主権国家システムが誕生して以来、それぞれの領域が国境で区切られ、各々の国家は軍事力といったハードパワーをもって国益を最大化しようとしてきた(11)。近代性のイデオロギーは、それを規範的に正当なものとみなす。その結果、人々はナショナリズムに囚われ、人類益を見出すことが出来ない(12)。国家間の関係は階層的で、不平等が国際法や国際制度にも埋め込まれている(13)。政治経済の側面から見れば、近代性のイデオロギーは進歩を最も善なるものとし、それゆえに利益率や資本効率を重視する市場原理主義が支持される(14)。近代性のイデオロギーはまた、「科学・技術・合理性の革新的能力」(15)による問題解決を盲信し、持続的経済成長を実現すべく、工学的発想に基づいて環境問題を解決しようとする(16)。

古い地政学のもとでは、地球規模の問題群は悪化の一途をたどる。気候変動は海面上昇とともに、農業環境を著しく悪化させ、人類全体の脅威となっている(17)。この問題に関する多くの科学者のコンセンサスにも関わらず、温暖化対策は遅々として進んでいない。また、核兵器が使用される危険性も相変わらず高いままである。たとえ限定的使用であって

(10) フォーク『パワー・シフト』、viii頁（原著：Falk, *Power Shift*, p. 8）。
(11) 同上、3頁。
(12) 同上、21頁。
(13) 同上、108–118頁。
(14) 同上、viii、104–105頁。
(15) 同上、viii頁。
(16) 同上、243頁。
(17) 同上、71–72頁。

も、核兵器の投下は自然環境に深刻な損害を与え、こちらも食糧生産の危機を引き起こしかねない[18]。残念ながら、核兵器不拡散条約(NPT: Treaty on the Non-Proliferation of Nuclear Weapons)は、核保有を認められた国とそうでない国を分ける点で、古い地政学の特徴である階層的国家間関係を示している[19]。同様に、国際連合の安全保障理事会や国際刑事裁判所も、こうした階層性が埋め込まれており、しばしば現実主義者の道具になっているとフォークは見る[20]。貧困や格差の問題も深刻であるが、新自由主義的国際経済体制はそれを再生産している[21]。さらに言えば、安全保障、環境問題、格差いずれの問題でも、新自由主義的エリートの利益を保護するような規範と制度が確固として存在し、解決を妨げている[22]。国境を越えた地球規模の問題群は、近代性のイデオロギーや多元主義的な主権国家システムでは非常に扱いにくいのである。

古い地政学の特徴である軍事力への依存は、アメリカのテロとの戦いにおいて一層顕著である。対テロ戦争はドローンを用いることで、世界を戦場に変え、「永遠の戦争」(perpetual war)となりつつある。この戦争では一般市民も潜在的な敵であり、攻撃対象になりうる。ドローンによる爆撃は国際法から逸脱し、説明責任を果たさないまま、膨大な文民被害を生み続けている[23]。また、戦争はしばしば多国籍の民間軍事会社に担われ、それも説明責任を減少させる要因となっている[24]。ヴェトナム戦争のみならず、アフガニスタンやイラクでの軍事力の行使の失敗を経てもなお、軍事力の有効性が盲信される現状が続く[25]。そして、軍事力の行使に伴うべき説明責任は、ますます曖昧にされたままである。

### 2.2 新しい地政学

フォークは、こうした古い地政学を現在の世界秩序に見る一方、新しい地政学の契機も同時に見出す。新しい地政学とは、軍事力の限界を理解し、ソフトパワーに重きを置く政治である。また、近代性のイデオロギーを全否定するのではなく、その弱点を克服しようとするものである[26]。そこでは軍事力の行使は重要性を失い、貿易に加えて、対話や外交が主要な政策となる。新自由主義的経済システムがもたらす不平等や不正義を問題とし、近代資本主義が引き起こすエコシステムへの負荷に焦点を当てる[27]。新しい地政学が目指

(18) 同上、255頁。
(19) 同上、153–154頁。
(20) 同上、195、239頁。
(21) 同上、104–105頁。
(22) 同上、68–69頁(原著：Falk, *Power Shift*, p. 62)。
(23) 同上、第11章。
(24) 同上、70頁。
(25) 同上、xix–xx頁。
(26) 同上、vii–xiii、2頁。
(27) 同上、第6章。

すのは、「人間志向の正当な新しい立憲主義」(a people-oriented *Just* New Constitutionalism)[28]である。そのためには、国連システムをはじめ、階層性を埋め込まれた国際制度は改革する必要がある。それによって、国際社会において「地政学的選択性と無関係な法の適用」[29]を実現する。新しい地政学において重要なアクターとなるのは、グローバルな市民社会である[30]。彼らはナショナリズムや国家主義ではなく、地球的次元の人類益を主要な価値規範とし、「よき生を共有する」[31]ことを目指す。こうした人々をフォークは「市民巡礼者」(citizen pilgrims)と呼ぶ[32]。

新しい地政学への変革は未だ実現の途上であるが、それを実現するには一体何が必要なのか。フォークは人々の意識を変えることが不可欠であると考える。そのためには、「実現可能性の地平」からの脱却が最も重要になる。実現可能性の地平とは、未来を想像することができず、「現在の囚人」[33]となった状態である。すなわち、主権国家システムに基づく古い地政学を前提に、(狭い意味での)合理的な問題解決を思考する状態である。新しい地政学の実現のためには、そこから離れて「必要性の地平」に目を向ける必要がある[34]。それは規範的に何が好ましいのかについて想像力を持つことであり、あるべき世界を思い描くことである。そうすることで、(狭い意味での)合理性や実現可能性に内在する権力関係や歪みが明らかになる。そのうえで、グラムシ主義的な観点から「願望の地平」という思考に向かうべきだとフォークは言う[35]。すなわち、人権を本質的な意味で実現するとともに、地球のエコシステムの保全を目指して、トランスナショナルな諸勢力を結集する思考である。

こうした転換の可能性を示唆するのが、2011年に草の根で広がったグローバルな民主主義運動である。「アラブの春」によって、中東から北アフリカにかけて民主化運動が広がると、アメリカでも「ウォール街を占拠せよ」と主張する運動が展開された[36]。また、パレスチナの人々の権利を守るための抵抗が、「ボイコット・投資引き揚げ・制裁(BDS: Boycott, Divestment, and Sanctions)のキャンペーン」という非暴力のかたちで行われた[37]。転換は決して自明ではないが、しかし、これまでの歴史では、冷戦の終焉や、南アフリカ共和国で

(28) 同上、72頁(原著：Falk, *Power Shift*, p. 76)。
(29) 同上、93頁。
(30) 同上、157頁。
(31) 同上、21頁。
(32) 同上、10頁(原著：Falk, *Power Shift*, p. 18)。
(33) 同上、101頁。
(34) 同上、105–106、140頁。
(35) 同上、107–108、142–144頁。
(36) 同上、143、162頁。
(37) 同上、75頁。フォークのBDSキャンペーンの分析については、リチャード・フォーク著、川崎孝子監訳『人道的介入と合法的闘い』東信堂、2020年の第21章を参照。

のアパルトヘイト体制からの移行といった「予期せぬ飛躍」(unanticipated jumps)[38]が生じてきたのである。

## 3．語られたこと、語られなかったこと

最後にフォークの『パワー・シフト』を読むことで生まれる疑問について少しだけ触れる。第一に、本書を読むと、世界秩序の転換はどれくらいの期間で、どのように進むのか、より詳細を知りたくなる。フォークは1975年の論考のなかで、秩序の転換について次のように述べている。

> 〔転換の〕時期の問題は根本的であり、答えに窮するものである。私はパラダイムの転換が今後数年の間に必要であり、かつ可能であると信じる。また、そのような転換が、より好ましい世界秩序の選択肢に向かう転換過程に影響を与える助けになるだろうと信じる。にもかかわらず、転換過程の継続期間は確信をもっては予想できない。それは二、三十年くらいの短い期間かもしれないし、数世紀にわたる長期間かもしれない[39]。

『パワー・シフト』のなかでは、この点について明確な記述は必ずしもないように見えるが、「前例のない規模の移行は現時点では一見したところ実現不可能ではあるが、この探求は、それが必要であり、可能であり、望ましいということを前提としている」[40]と述べている。ただし、古い地政学が問題に対処できず、危機に陥っていることはすでに明らかで、そこに新しい地政学のビジョンを広め、浸透させる好機が存在すると考えている[41]。おそらく、フォークにとって世界はまだ人々の動員が限定的で、より一層の意識の変革が必要な段階なのだろう。

そこから出てくる次の疑問は、あるべき規範的ビジョンのさらなる詳細である。『パワー・シフト』は広範囲にわたって地球規模の問題群を取り扱い、それら相互の関連性を明らかにしている。けれども、本書の「訳者あとがき」にもあるように、触れられていない領域としてジェンダーや人間中心主義の問題も残っている。特に「人新世」をどう捉え、人間中心主義をどう取り扱うかという問題は、フォークが論じる以上に複雑で丹念な検討が必要な領域であるように思われる[42]。われわれは複雑で多様な領域において、どこまで規範的ビジョンを突き詰め、統合することができるだろうか。まして、それを人々の動員につなげられるのだろうか。われわれの意思と想像力が試されている。

(38) フォーク『パワー・シフト』、151頁（原著：Falk, *Power Shift*, p. 154）。

(39) Falk, “A New Paradigm,” p. 998.

(40) フォーク『パワー・シフト』、注10、232頁（原著：Falk, *Power Shift*, p. 234）。

(41) 同上、vii頁。

(42) たとえば、クリストフ・ボヌイユ、ジャン=バティスト・フレソズ著、野坂しおり訳『人新世とは何か：「地球と人類の時代」の思想史』青土社、2018年。